

研究課題 (テーマ)	在宅で暮らすレビー小体型認知症の人を対象とした認定看護師の看護実践とケアモデルの構築			
研究者	所属学科等	職	氏名	
代表者	看護学部 老年看護学講座	助教	米山真理	
分担者	看護学部 老年看護学講座	講師	青柳寿弥	
	看護学部 老年看護学講座	講師	伊藤裕佳	
研究結果の概要				
<p>認知症の中でもアルツハイマー型認知症に次いで2番目に多いとされるレビー小体型認知症(以下、DLB)は、幻覚や自律神経障害など様々な症状を呈し、他の認知症と比較して生活を円滑に送るための調整が非常に難しい。専門職者からの支援が必ずしもうまく行くととは限らず、DLBの人への支援は各専門職者が手探りでを行っているため、包括的な在宅医療体制は未だ整っていないという現状である。包括的な在宅医療体制には多職種連携が欠かせず、その要となる役割を担うのは看護師である。</p> <p>ゆえに本研究では、認知症看護に関して十分な知識と技術を持つ認知症看護認定看護師が、在宅で暮らす DLB の人に行っている看護実践を明らかにし、訪問看護師や介護士がケアの基準として使えるケアモデルを構築することを目的とした。これにより、DLBにおける在宅医療・介護を支える職員の資質向上を図ることができると考える。</p> <p>今回は第一段階として、認知症看護認定看護師が在宅で暮らす DLB の人に行っている看護実践を明らかにした。分析方法は下記に示すとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①認知症看護認定看護師にインタビューガイドを用いてインタビューを実施する。</li> <li>②インタビュー内容を逐語録に起こし、何度も内容を読み返す。</li> <li>③看護実践は何かという視点で意味のあるまとまりに区切る(コード)。</li> <li>④コードを同じような特徴をもつものでまとめて名前をつける(サブカテゴリー、カテゴリー)。</li> </ol> <p>上記の手順で認知症看護認定看護師4名にインタビューを実施し、DLBの人5事例に関する看護実践についてのデータを得た。その内の1事例について詳細に分析した結果、DLB本人や家族、それらを取りまく専門職に対する看護実践が明らかとなった。DLB本人に対しては幻視に対する不安解消や症状の確認、家族に対しては介護負担軽減のための社会資源活用、専門職に対しては円滑な連携をとるための準備といった看護実践を見出した。</p>				
今後の展開				
<p>今回、認知症看護認定看護師4名より DLB5 事例のデータを得た後、DLB1 事例の看護実践を明らかにした。今後も残りの DLB4 事例の分析を継続していく。また、ケアモデルの構築に向け、在宅で暮らす DLB の人に行っている認知症看護認定看護師の看護実践に関する内容を詳細に分析していく。</p>				